中間言語としての古文の現代語訳
――『徒然草』を例として――

鈴　木　義　昭

キーワード
中間言語　古文の現代語訳　徒然草　高校生　外国人学生

1.　はじめに

「翻訳文体」という言い方がある。これは西洋語を翻訳する際、専ら用いられる術語である。翻って、日本の古典語を現代語に改める時にも、こうした翻訳文体にも似た構造を採ることがある。西洋語を翻訳する際、欧文直訳派と漢文直訳派があったように、古文（＝原文）と現代日本語の中間に在って、その橋渡しをする文体のことである。必ずしも純粋な日本語ではないという意味において、それは一種の「中間言語」と言ってよいであろう。すなわち、原文の文法的構造を留めながら、それに対応する現代語で忠実に書かれているからである。

中国語の原文を日本語の文法構造に合わせて読んだ漢文訓読文体も、こうした意味においては、同じ構造体であると思われるが、本稿では、主として原文である日本語の古文と現代日本語との中間言語としての現代語訳について、『徒然草』の注釈書等を例に採りながら、いくつかの特徴を挙げてみたい。

2.　和文脈（一）

吉田兼好作と伝えられる『徒然草』は、日本文学の古典として、永い間読み継がれてきた。注釈書の類も数多く、現代語訳も多くの学者・教育者の手によってなされてきた。全編を対象にするものから、所謂学習参考書の類まで多岐を極めている。本稿では、読者の目に最も触れ易いものをランダムに選ん

で、その中の文体、古文翻訳の際に起こる問題を第二言語のそれとして扱うことにする。

例えば、『徒然草』第一段には、

いでや、この世にうまれては、願はしかるべき事こそ多かめれ。

という個所がある。これに対して、①～⑩のような現代語訳がなされている（アンダーラインは筆者）。

①いやもう、（人間たるものは）この世に生まれて来たからには、（あああありたい、こうありたいと）当然願わしく思うであろう事こそ多くあるようだ。（松尾聡・『徒然草全釈』1989 清水書院）

②さてまあ、此の世に生まれたからには、当然誰しもああもありたい、こうもありたいと望ましく思うはずの事が沢山あるようである。（三谷栄一・文法設問『徒然草』解釈と鑑賞 1993 有精堂）

③さてまあ、（人間として）この世に生まれたからには、（こうあってほしいと）願うべきことが多くあるようだ。（小出光『文法全解 徒然草』旺文社 1996）

④いやどうも、（人は）この世に生まれてきたからには、人間として当然願わしく思うような事は、まことに多いであろう。（秋末一郎『文法詳解 徒然草』中道館 1998）

⑤さてまあ、この世に生まれたからには、（誰しも）当然 願わしい事がまことに多いようだ。（吉沢貞人『古典新釈 徒然草』中道館 2004）

⑥いやもう、この世に生まれたからには、（こうありたいと）願うにちがいないことは、実に多いようである。（新明解古典シリーズ・桑原博史『徒然草』三省堂 2005）

⑦さてもう、この世に生まれたからにはこうありたいと願うことが、ほんとうに多いようである。（〈第一学習社版〉高等学校 『古典 古文編（第Ⅰ章）』準拠 朋友出版 出版年記載なし）

⑧いやもう、この世に生まれたからは、誰でも当然こうありたいと思うことがいろいろと多いようである。（対訳古典シリーズ所収・安良岡康作訳注『徒然草』 旺文社 2002）

⑨さてさて、この世に生をうけたからには、誰でも、願わしいと思うこと

が、あれやこれやと、どっさりあるもののようだ。（完訳『日本の古典』所収・永積安明『方丈記 徒然草』旺文社 2002）

⑩さて、人がこの世に生まれてきたからには、当然だれでも願うことがいろいろあるようだ。（三木紀人『徒然草』（一）全訳注 講談社学術文庫 2005）（出版年は、本稿でよった諸本の出版年である。また、以下、書名は、執筆者名＋『徒然草』の形で簡称することにする）

それぞれのアンダーラインの個所を見れば分かるとおり、中高生や外国人がそれを読む際、当該個所に違和感を覚えるのではないだろうか。各者各様、表現の違いはあるが、これこそが筆者の言う、「中間言語」であり、古文を現代語に改める時、よく表れる文体と言ってよいであろう。以下、詳しく見てみることにする。

まず、①～⑥は、所謂「学習参考書」における現代語訳であり、⑦は、教科書準拠の参考書、⑧～⑩が一般書による現代語訳である。学習参考書を多く引いたのは、古文学習者としての読者が多いこと、しかも読者の年齢が圧倒的に若く、感受性が鋭く、影響されたり、反発したりすることも多いと推察されるからである。

ここでは、「願はし」、「べし」、「こそ」、「めり」の各語の取り扱いが問題になるであろう。「願はし」という形容詞は、「願ふ」の形容詞形であり、現代語では、「望ましい」という形容詞形の他、「願わしく思う」のように、「形容詞＋動詞」の方が一般的になっている。形容詞単独で用いられず、動詞が併用されるものには、感情を表す古典形容詞にその傾向が高いように思われる。例えば、「あへなし」、「あやなし」、「思はし」、「慕はし」、「目覚まし」、「をかし」等があって、「張り合いがない」、「道理に合わない」、「心を惹かれる」、「（打消しを伴って）考えどおりに運ばない」、「目に余る」、「趣がある」等の意とされる。

助動詞「べし」は、現代語では、

○　今すぐにでも医者に見せるべきだ。

のように、連体形で用いられることが多い。あるいはまた、

○　無用の者、立ち入るべからず。

のように、古文の言い回しを残す文章にしか用いられなくなっている。そのた

め、「当然～すべきだ」のように、助動詞自体が持つ「当然」の意味を補うために、副詞「当然」を付け加えざるを得なくなってくる。あたかも、漢文訓読文で「当に～すべし」と分けて読むのと似た操作を行っているのである。これを本稿では、「再読型翻訳」と名付けておくことにする。

また、係り助詞の「こそ」もある一定の言い方以外は、用いられることはそれほど多くない。例えば、

○　これこそ私が待ち望んだことだ。

○　早く来たからこそこんなにいい席にすわれたのだ。

○　今でこそ普通の小父さんだが、昔は野球の選手として鳴らしたものだ。

のような「特立」、「強調」の時に用いられる以外には、それほど多用されることはない。係助詞「こそ」が相呼応する已然形を導いて、文末を指示する働きをしていると考えるならば、大げさな強意とする必要はなくなる。②の「沢山」、③・④・⑤の「まことに」、⑥の「実に」、⑦の「ほんとうに」、⑧・⑩の「いろいろと」、⑨の「どっさり」等のような、原文にはない語を使って、敢えて不自然な強調をする必要はないであろう。実を言えば、こうしたものは、いずれも副詞であって、漢文訓読文体の特徴的表現法と言えるのではないかと思われるが、後稿に待つ。

文末にある助動詞・現在推量の「めり」は、古典語だけに残り、現代語では、ほとんど用いられなくなっている。「～のようだ」、「～らしい」、「～のように見える」、「～のように思われる」と訳されて、間接化、婉曲化の作用を持つとされる。その中で、④の「であろう」だけは、単純な推量であって、婉曲化が行われていない意味で、十分意を尽くしているとは言えない感じ（誤訳？）を抱かせるのであろう。なお、「めり」が漢文訓読文には用いられないとの説もあって、当該文が和文であることが傍証されて興味深い。

3.　和文脈（二）

また同じく、『徒然草』第九段「女は髪のめでたらんこそ」を例に採ってみたい。

女は髪のめでたからんこそ、人の目立つべかめれ。

とあるのを、

⑪女は髪のりっぱであろうことこそ（一番）人の注目を得るはずのことであるようだ。（松尾『全釈』）

⑫女は、髪の美しいようなひとこそ、人が目をつけるもののようだ。（永積『徒然草』）

⑬女性というものは、髪の立派なのが、最も、他人の目をひきつけるようであるが、……。（安良岡『徒然草』）

⑭女は、髪の立派なのが、人の目を引くようである。（三木『徒然草』）

と訳している。ここでも助動詞の婉曲・推量「ん（む）」、助動詞の推量「べし」＋助動詞の婉曲・推量「めり」の訳し方、「りっぱであろうこと」、「美しいような」、「はずのことであるようだ」に違和感を覚えるであろう。これも本稿で言う中間言語＝古文翻訳文体の一つであると言えよう。

古文の意志・推量の助動詞「ん（む）」の意味は、現代語では、「～う」、「～ようだ」に移っている。例えば、

思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。（『枕草子』第＊段）

とある文を、

かわいく思うような子供を僧侶にしたとしたら、それこそ（親が）気の毒なものだ。（『全訳 古語例解辞典』）

のように、「ような」を入れて訳すわけであるが、「む」と「む」が呼応して、仮定「～たら」に収束しているため、「ような」は、屋上屋を架す類となって、違和感のある訳し方となっている。もっとも、

可愛がりたいなァって子をさ、お坊さんにしちゃうって発想っていうのは、ホント、胸が痛くなっちゃうよねェ。（橋本治『桃尻語訳 枕草子』）

のような訳がないわけでもないが、一般的ではない。

また、一説によると、婉曲・例示を示す機能とも言う。こういう意味では、前者は婉曲の機能を喪失している。ここで、前述の「主題化」を表す「こそ」とともに用いるのは、言語の経済性の原理に反するであろう。よって、

⑬女性というものは、髪の立派なのが、最も他人の目をひきつけるようであるが、……。（安良岡『徒然草』）

⑭女は、髪の立派なのが、人の目を引くようである。（三木『徒然草』）

の訳し方が現代語としては、穏当のように思われる。

助動詞「べか・めれ」は、⑦は「べし」の「当然」の意味を強調したものであるが、ここでは、前述のように、「当然」を補った形で、漢文訓読型の再読文字風に「当然、注目を集めるもののようだ」くらいにしておくのが穏当であろうが、当然の意はなくてもよいのではなかろうか。⑩では、副詞「最も」を挿入することによって、「例外が少ない」、「道理にかなっている」＝「当然」の含意を加えたものと思われる。また、「～もののようだ」は、「～ものだ」と「～のようだ」の複合したものであろう。「ものだ」という「一般性」を表す表現に、それを直截に言うのを避けて、婉曲味を加えているわけである。

4. 敬語

ここでは、所謂「敬語」の表現が問題になる。敬語は日本人の中高校生にとって、習得途上の事項であり、外国人学生にとって、習得困難な事項の一つでもある。

『徒然草』第三十二段に、

九月廿日の頃、或る人に誘はれ 奉りて、明くるまで月見ありく事侍りしに、思し出る所ありて、案内させて入り給ひぬ。

という個所がある。これに対して、

⑮（陰暦の）九月廿日のころ、ある（高い身分の）方にお誘われ 申し上げて、夜が明けるまで月を見て歩きまわることがございましたが、（途中で、その方は、ふと）お思い出しになる家があって、従者に取り次ぎを申し入れさせて、おはいりになってしまった。（松尾『全釈』）

⑯九月廿日の頃、ある人におさそわれ 申して夜があけるまで月を見てあちらこちら歩きまわることがございましたが、その方がふと思い出される所があり、取り次ぎをたのんでそこへお入りになりました。（三谷『徒然草』解釈と鑑賞）

⑰月二十日のころ、ある人のお誘いをお受けして、夜の明けるまで月を見て歩きまわったことがありましたが、（その人は途中で）お思い出し なさる所があって、（供の者に）取つぎをこわせて（その家に）おはいりになった。（小出『二色刷り徒然草』）

⑱九月二十日のころ、ある方のお誘いをこうむって、夜の明けるまで、月を見て歩くことがございましたが、その方がお思い出し になら れる家があって、取次を乞わせておはいりになってしまった。（永積『徒然草』）

⑲九月二十日ごろ、ある方のお誘いをこうむって、夜の明けるまで、月を見て歩きまわったことがございましたが、その途中で、その方が思い出された所があって、そこへ行き、私に家の中の様子をうかがわせてから、室内にお入り になった。（安良岡康作『徒然草』）

⑳九月二十日のころ、ある人にお誘いをいただいて、夜明けまで月見をして歩いたことがあった。その方は、ふと思い出された所に立ち寄って、取次ぎを請わせてお入りになった。（三木『徒然草』）

等の現代語訳がある。本文の方では、補助動詞「奉る」（謙譲）、補助動詞「侍り」（謙譲）、動詞「思（おぼ）す」（尊敬）、補助動詞「給ふ」（尊敬）が使われている。それに対して、現代語訳⑪では、「お～る」（尊敬）、「申し上げる」（謙譲）、「ござる＋ます」（丁寧・丁寧）、助動詞「ます」（丁寧）（或いは「ございます」で、丁寧）、連語「お～になる」（尊敬）が使われている。補助動詞・謙譲「奉る」に対して、尊敬連語「お～る」は疑問の残るところである。また、⑫でも、「奉る」に尊敬「る」を用いており、違和感を覚える。⑬では、美化語「お誘い」、尊敬「お受けする」と処理する点、⑭、⑮では、美化語「お誘い」、受身・尊敬「～をこうむる」（語彙による受身）を用いて処理をする。そこまで複雑な言い方をせずに、筆者による、

㉑九月二十日の頃、あるお方に誘われ申し上げて、夜が明けるまで月見をしながら歩いたことがありましたが、（その方は）思い出されるところがあって、案内させて（とある家に）お入りになってしまいました。

くらいの訳でよいのではないだろうか。

5. 直訳と意訳

これまで述べてきたように、さまざまな出自を持っている諸語だけに、その現代語訳には難しい点がある。そのため、ここで引いた参考書では、以下のように直訳とか意訳という語を用いて断わりを入れている。

○　「口訳」は、できるだけ語法を正確に理解させるために、はなはだしく不自然な感じを覚えさせないかぎりにおいて、きびしく直訳体をとった。（松尾『徒然草』）

○　下段には口語訳を掲げたが、つとめて原文に即した直訳体とし、原文の語脈がわかるようにし、……。（三谷『徒然草』解釈と鑑賞）

○　通釈は語学的な正確さと口語としての自然さ、わかりやすさの二点に留意し、……。（小出『文法全解　徒然草』）

○　口語訳はできるだけ直訳を旨とし、本文にない補いの語句はだいたい（　）でくくるようにした。（桑原『徒然草』）

○　通釈は、逐語訳の方法をとり、意訳はさけました。これは拙いようでも読者に対しかえって親切で、着実な行き方と考えたからです。（吉沢『徒然草』）

○　通釈は、できるだけ原文に忠実な逐語訳としました。（秋末『文法詳解　徒然草』）

○　大意によって大づかみした内容をもとに、ここでは一文ごとに理解できるようにしてあります。（高等学校『古典　古文編』準拠）

○　口訳は、本文の表現に即して、平易なものにしようとして、極端な意訳を避け、かつ、本文となるべく対照できるようにした。（安良岡『徒然草』）

○　現代語訳は、なるべく原文に即したものとしたが、口語文として独立に通読できるように、多少の意訳を試みたところがある。（永積『徒然草』）

○　現代語訳は、原文に忠実であるようつとめたが、あまりに長文で文意が取りにくい部分などは、必要に応じて文を切って訳した。（三木『徒然草』）

のように、「直訳体」、「口語としての自然さ」、「直訳」、「意訳は避けた＝直訳を採った」、「逐語訳」、「一文ごとに理解できるようにした」、「多少の意訳を試みた」＝「大部分は直訳」、「原文に忠実」等の断りが入っている。学習参考書としては、助動詞等の働き、意味が分かるような工夫をしていると言い、一般書としては、原文の味を残しながら、極端な意訳は避け、多少は意訳をしたと

言うのである。注訳者たちの意識の中にあるのかないのかは不明であるが、こうした訳文が中間言語であること、すなわち、訳文の言い回しに不自然なところのある点を告白することになる。しかし、そうした意訳と現代語との違いが語釈等で説明されることがない点が、問題となるであろう。すなわち、中間言語をどのようにしてそこに在る現代語に置き換えたらいいのかが説明されないからである。

6. 漢文訓読文体

こうした、助動詞・補助動詞等が多用された文がある一方で、漢文訓読による簡潔な文があるのも『徒然草』の特徴である。第三十八段「名利につかはれて」などもその好例であろう。

名利につかはれて、閑かなるいとまなく、一生を苦しむことこそ愚かなれ。財多ければ身を守るにまどし。害を買ひ累を招くなかだちなり。

この文に、助動詞は二語しか使われていない。その現代語訳は、

㉒名誉利益に使役されて心静かな暇もなく、一生を苦しめることこそ、ばからしいことである。（まず利欲について考えてみるのに）財産が多いと、自分の身を守る上に欠ける点がある。（財産は）わざわざ危害を招き、面倒を招く媒介物である（からである）。（松尾『全釈』）

㉓名誉や利益といった欲望に使役されて、心静かにしているひまもなく、一生あくせくと、わが身を苦しめるのは、とりわけ愚かなわざである。財産が多ければ、身を守ることがおろそかになる。また財産が多いと、わが身を守りにくくなる。それはまた、害を受け苦労を招くなかだちとなるものである。（永積『徒然草』）

などとなり、違和感のない、ごく自然な文となっている。また、『徒然草』第百三十一段は、

貧しき者は財をもて礼とし、老いたる者は力をもて礼とす。己が分を知りて、及ばざる時は、速やかにやむを智といふべし。

とあり、

⑲貧乏な人は、人に財貨を贈ることをもって礼儀と心得、老人は人のために筋肉の力を出すのをもって礼儀だと心得ている。（しかし、これは

誤った考えかたである)。自分の身のほどを知って、(その事が)とうてい自分の力に及ばない事であるときは、早くやめるのを賢いやり方だというべきである。(松尾『全釈』)

⑳貧しいものは財物を贈ることを礼儀とし、年老いた者は(人のために)力仕事をすることを礼儀だと思っている(しかしこれは供に間違った考えである)。自分の身のほどを知って、自分の及ばない時はただちにやめるのを賢明なやり方と言うことができる。(三谷・文法設問『徒然草』)

㉑貧しい者は、財貨を人におくることを礼儀と心得、年老いた者は、体力をもってするのを謝礼だと心得ている。自分の限界を知って、とてもできないときは、すぐさまやめてしまうのが、知恵のある生き方といってよい。(永積『徒然草』)

㉒貧しい人は、財貨を人に贈ることを謝礼する事と思い、老人は、力仕事をしてやることで謝礼を果たすことと思っている。しかし、これは身の程を心得ていないための誤りであって、自分の身の程を知って、とても能力の及ばない時は、すぐにやめてしまうのが、賢いゆき方といってよい。(安良岡『徒然草』)

㉓貧しい者は、財貨を人に贈ることを礼儀と心得、老いた者は、その体力を貸すことを礼儀と心得るものだ。しかし、自分の身の程を知って、力の及ばないときはすぐにやめるのを知恵と言うべきである。(三木『徒然草』三)

とある。こうした文中にも取り立てて問題とする個所はないと言ってよいであろう。やはり、助動詞が使われていない文章ゆえ、語義そのままを現代語に移し変えることができるからであると思われる。序でながら言えば、現代日本語の出自は、漢文訓読文体に負うところ大であること、筆者のしばしば言及しているところである。

7. おわりに

高等学校の国語の時間には、日本文学の古典＝古文の授業があり、古文が教えられている。中学校でも現代語訳を中心とした形で、古文の入門を行ってい

る。高等学校のある古文の教科書準拠参考書（所謂「虎の巻」）では、「学習のめあて」、「大意」、「品詞分解」、「通釈」、「語句の研究」、「問」等の項目が設けられている。先にも挙げた『徒然草』第一段「いでや、この世に生まれては」について、「通釈」では、

さてもう、この世に生まれたからにはこうありたいと願うことが、ほんとうに多いようである。

と書かれる。「語句の研究」では、

いでや　文頭に使われた場合、「いやもう。さて」

この世に生まれては　「この世」には「人間として、この世の生を受けたからには」という意味が含まれている。

願はしかるべきこと　「願はし」は望むところを乞い願う状態を表す言葉。「べき」は当然の意。

多かめれ　「多かる」が撥音便になって、「多かん」となり、「ん」が表記されない形になっている。

とあるが、これだけの説明で、通釈の段階の理解に到達できるのであろうか。また、通釈も中間言語であって、完全な現代語になっていないとすれば、生徒は教師の言ったことや参考書にある説明を鵜呑みにして覚えるしか方法がないことになる。自分の思考による解釈など、思いもつかないであろう。教科書には、

㊀　作者が「願はし」「あらまほし」「ありたし」と言葉を変えて述べている願望の対象を整理してみよう。

㊁　兼好が最も望ましいこととしているのは何か。まとめてみよう。

㊂、㊃は省略。

のような問題が付けられているが、自分なりの解釈ができないうちにこうした問いが解けるのかは疑問である。教師たちは、いきおい文学史的な知識を振りかざして、生徒たちを煙に巻くのが落ちであろう。

一方、第二言語を含んだ日本語を外国人学生に教える時の問題も小さくないであろう。現在、中国の日本語専攻の学科では、日本語の古典を教えるようになっているとのことである。その多くが日本人教師によって、日本の高等学校の、古文の教科書によって行われているとも聞いている。その際に、どのよう

な方法を用いて教えているのかは現在のところ、未調査である。

筆者は、中国で編集された『日本古典文学読本』（浙江古籍出版社 2002）の編集に加わったことがある。この本では、上部に原典を挙げ、下部に現代日本語訳を置き、注釈を施したものである。巻末には中国語訳も置いてあり、私などは、日本人のやり方としては、万全の方法を取ったものと思っていた。ところが、中国人のある教師から、「日本語の古典語を初めて学習する学生には難しいです。もっと文法項目を充実させてくれたらよかったですね」と言われてしまった。本稿で述べてきたような中間言語をそのまま用いているのであれば、学習者の混乱は必至であろう。古文嫌いを生み出し続けていくことにならないであろうか。少なくとも、現代語として普通に使われている言葉による現代語訳を提供したいものである。将来、大学等の各教育機関で日本語の古文が教えられるようになった時のために、一定のパースペクティブを持っておくべきであろう。

（完）

参考文献：

浅野敏彦『国語史のなかの漢語』（1998年２月 和泉書院）
池上禎造『漢語研究の構想』（1984年７月 岩波書店）
佐藤喜代治編『漢字講座』第三巻『漢字と日本語』（1987年11月 明治書院）
佐藤喜代治編『講座国語史』第６巻『文体史・言語生活史』（1972年２月 大修館書店）
佐藤喜代治『漢語漢字の研究』（1988年５月 明治書院）
佐藤喜代治編『漢字講座』第９巻『近代文学と漢字』（1988年６月 明治書院）
林巨樹『近代文章史研究』――文章表現の諸相――（1978年３月 明治書院）
林四郎『漢字・語彙・文章の研究へ』（1988年２月 明治書院）
中沢希男『漢字・漢語概説』（1978年 教育出版）
山田孝雄『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』（1935年５月 宝文館出版）
山田孝雄『國語の中に於ける漢語の研究』（1940年４月 宝文館出版）
山本正英『近代文体発生の史的研究』（1965年７月 岩波書店）